

機関番号：32677

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820008

研究課題名 ユダヤ的なものの言語態：フロイト、レヴィナス、デリダ

研究課題名（英文） Jewishness in the writings：Freud, Levinas, Derrida

研究代表者

小森 謙一郎 (KOMORI KENICHIRO)

武蔵大学・人文学部・准教授

研究者番号：80549626

研究成果の概要（和文）：本研究では、フロイト・レヴィナス・デリダが共有している「ユダヤ的なもの」を彼らのテキストに則して考察し、その議論に内包される「母なるもの」への眼差しが、性的差異の観点からして伝統的な男性優位の考え方にはもはや収容されないということ、またその限りにおいて彼らの言説が従来想定されてきたのとは別のユダヤ性を提示しているということを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research made it clear that we could trace a notion of “motherhood” in the writings of Freud, Levinas and Derrida and that this notion, which should not be dealt with from the traditional and patriarchal standpoint of Judaism, would help us to find another Jewishness other than the conventional identity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	720,000	216,000	936,000
2010 年度	580,000	174,000	754,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ユダヤ、言語態、一神教、フィクション、コーラ

1. 研究開始当初の背景

ユダヤ人とその思想に関する研究書は、国内・国外を問わず数多くあるが、旧約聖書や離散の歴史、あるいはホロコーストやイスラエルといった名に結びつけずに、「ユダヤ的なもの」を論じた文献は多くはない。それは歴史的ないし経験的な事象こそが「ユダヤ的なもの」を決定しているかのようである。

そうした歴史的ないし経験的な事実関係はもちろん重要であるが、しかしそれとはまた別に「ユダヤ的」と形容されうる思考形態がありうるのかどうか、そしてまたそれがありうるとしたら、それはどのような形態であるのか、考察する必要もあるだろう。

そこで本研究では、とくにフロイト・レ

ヴィナス・デリダという 20 世紀を代表する 3 人の思想家に焦点をあてつつ、その差異と同一性を検討することで、「ユダヤ的なもの」を別の角度から理解しようとした。そしてこの 3 人に焦点をあてた背景には、大きく分けて二つの事情がある。

一つは、私自身が従来「脱構築」という一語に要約されがちなデリダの諸考察を、より広範なヨーロッパ思想史の流れのなかで検討しようとする点である。

デリダの思考は、その受容のされ方に応じて、いわゆる「ポストモダン」というくくりのなかで捉えられてきたが、彼がユダヤ人であるという事実は、これまで十分に考慮されてきたとは言い難い。

たとえば、デリダは終生レヴィナスの盟友であり続けた一方、ときにレヴィナスのユダヤ思想——それは正統的とは言わないまでも非ユダヤ的では決してないだろう——に対してかなり批判的な見解を表明している。

だとすれば、デリダの思考のうちには、さしあたり「ユダヤ思想に批判的なユダヤ的なもの」とでも呼べそうな契機があることになるであろうが、そうした一見非ユダヤ的な契機はいかにしてなおユダヤ的でありうるのか——あるいはそうではないのか——、レヴィナスの思想ともども考えてみる必要があるだろう。

二点目の事情としては、フロイトが創始した精神分析が「ユダヤ的学問」とみなされがちであったことがあげられる。

というより、フロイト自身、このことをつねに気にかけていたのであり、そうした傾向を避けるべく少なからぬ努力をはらっていた。しかしその生前最後の著書『モーセという男と一神教』では、むしろ「ユダヤ的なもの」を考慮に入れるべく主張しているように思われる。

この点についても、それまでの論文や発表のなかで考察を加えてきたものの、当の著作が後代の思想に及ぼした無視できない影響については、研究課題の範疇を越えることもあり、十分に検討することができずにいた。

こうした事情から、従来の私自身の研究成果を発展させるかたちで、デリダにおけるユダヤ的なものを、フロイトやレヴィナスのそれと比較しながら考察すると同時に、そもそも『モーセという男と一神教』が提示したユダヤ性はいかなるものなのか、その波及効果を念頭におきつつ検討していく必要性を感じていた。

2. 研究の目的

そこで本研究では、以下の二点を主要な目的とした。

(1) まず最初に、フロイトの『モーセという男と一神教』の綿密な読解を通じて、そのなかで提示された「ユダヤ的なもの」の輪郭を明らかにするとともに、これが後代の思想家に与えたインパクトを、とくにレヴィナスとデリダに焦点をあてて考察する。

「モーセが実はエジプト人であり未来のユダヤ人によって殺されたのだ」とするフロイトの説は、伝統的なユダヤの教えをできる限り尊重しようとするレヴィナスにとって、受け入れがたいものであった。こうした反応はユダヤ人の思想家にとって決して不自然なものではなく、マルティン・ブーバーの『モーセ』にもみられるように、フロイトの説はオーソドックスなユダヤ思想からすれば、む

しろ黙殺されてしかるべきものだったと言えるだろう。

この意味では、ユダヤ史の専門家であるイェルシャルミが『フロイトのモーセ』において、精神分析の父のユダヤ性を分析しながら、彼の説に批判的な立場をとっているのも驚くにはあたらない。デリダはしかし、『アルシーブの病』のなかで、そのイェルシャルミの異議に対してフロイトの説をある程度まで擁護している。デリダのこうした擁護は初期の『エクリチュールと差異』などにもみられ、モーセに関するフロイト寄りの立場は、デリダの場合一貫したものであったと思われる。

だとすれば、フロイト＝デリダ的なユダヤ性は、レヴィナス＝ブーバー的なユダヤ性と一体どう違っているのか、彼らの言説に即して明らかにすることができるだろう。

(2) 次に、そのようにして区別されるユダヤ性が、にもかかわらず同じ「ユダヤ的なもの」を共有しているのだとしたら、それは果たしていかなるものでありうるのか、やはりフロイト・レヴィナス・デリダのテキストを手がかりにして検討する。

ここで鍵となるのは、デリダが「コーラ」という語に着目してきた事実である。

「コーラ」なる概念は、プラトンの『ティマイオス』において宇宙生成論と絡めて提示されており、「場所」「生成の座」「受容体」等々と関連づけられている。そしてプラトンは、これをさらに「母なるもの」と関係づけているのであるが、デリダはみずからのキャリアを通じて、その意義を問い直しているのである。

だとすればこのとき、「ユダヤ的なもの」とは果たして男性的であるのか女性的であるのか、とくにその性的差異について検討してみる必要があるだろう。

というのも、伝統的なユダヤの教えはつねに男性性に優位を認めてきたようにみえるが、フロイト・レヴィナス・デリダのテキストは必ずしもそうした教えに忠実ではないからであり、性的差異にまつわる彼らの議論は一種の傾向を——つまり「母なるもの」への隠された眼差しを——ひそかに共有しているように思われるからである。

もっとも、彼らの議論もまた一枚岩的ではなく、それどころか多くの点で見解は異なっている。したがって、フロイト・レヴィナス・デリダのうち誰か一人に焦点をあてるというよりも、タイプの異なる三人それぞれのユダヤ性を考察することで、「ユダヤ的なもの」に関する理解を深めることができるだろう。

これによって、各々のユダヤ性についてすでになされた先行研究をより多角的な視点から見直すことが可能となると同時に、ユダヤ性そのものについての新たな考え方から

出発して、三人の思想家を捉え返すことも可能になるはずである。

3. 研究の方法

前項で述べた研究目的に応じ、主として下記の三点に重心をおきつつ、研究を進めていった。

(1) 後代のユダヤ人思想家の反応を考慮に入れた上で、フロイトの『モーセという男と一神教』そのものを読み直す。

問題なのは、この著作がなぜレヴィナスやデリダの立場を分けることになるのかということであり、したがってそもそもそこには一体どのような主張が秘められているのか、ということである。

後者の点については、すでに発表した論文のなかで、ある程度まで考察を進めており、それを発展させるかたちで、研究をさらに深めていった。

(2) フロイトの説に対するレヴィナスとデリダの反応を整理し、彼らの議論を比較・検討する。

この作業を遂行するにあたって示唆的なのは、「ジャック・デリダのおかげで（ジャック・デリダに感謝）」と題されたブランショの論考である。これはデリダへと宛てられたテキストではあるものの、レヴィナスからの引用も少なからずなされており、さらには「モーセはエジプト人である」という説をきっぱりと斥けている点で、本研究にとって貴重な補助線となった。

ブランショはレヴィナスとデリダ双方にとってきわめて近い友人であったのだが、非ユダヤ人である彼はフロイトの説を否定した上で——したがってどちらかと言えばレヴィナスに近い立場をとった上で——、「デリダに感謝」する論考を公にしているのである。

(3) フロイト・レヴィナス・デリダが共有している「ユダヤ的なもの」を考察する。

一般的にユダヤ思想は父権的なものと思われがちであり、そのことは必ずしも間違いではないだろう。実際、彼らの言説のうちにも、それぞれ独特な仕方でも「父なるもの」の痕跡が残されている。

しかし、三人の思想家の議論に内包される「母なるもの」への眼差しは、伝統的な男性優位の考え方にはもはや収容されえない。だとすれば、その眼差しはどのようにして培われ、彼らの議論のなかでいかなる場を占めているのか。それぞれの言説に沿って具体的に検討していった。

4. 研究成果

上述の目的と方法のもと研究を遂行した

結果、次の三点にわたる成果が得られた。執筆された論文は、一般的な学術論文と比べ分量的に長く、射程としても広いものになっている。

(1) まずフロイトのモーセ論に関しては、論文「留保された未来——フロイトと偉大な男たち」を執筆した。

ここでは、フロイトがモーセに比肩しうる「偉大な男」の例として「ゲーテ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ベートーヴェン」という三人の芸術家の名をあげている点に着目し、その意味を考察した。フロイトは音楽という分野にはとくに明るくはなかったはずであるのに、ベートーヴェンという名をあげた理由は一体どこにあるのか、この問いに答えるべく試みつつ、そもそもフロイトにとって「モーセという男」がいかなる存在であるのかを検討した。

結論としては、フロイトの思考にはロマン・ロランという友人から示唆を受けた痕跡があり、これが彼をして「母なるもの」に眼差しを向けさせたことを明らかにしている。宗教をめぐる両者のやりとりは、ときに鋭い対立をも伴っていたが、フロイトがそこから得たものはおそらく過小評価されるべきではない。

そういうわけで、この論文により、フロイトのモーセ論における「ユダヤ的なもの」の形成過程にとって不可欠な一局面を明らかにすることができた。その形成は彼がユダヤ人であるという事実のみ由来するのではなく、非ユダヤ的な世界との関係によって規定されてもいるのである。

さらに本論文は、国際的にも従来あまり着目されてこなかったフロイトとロランの関係の重要性をも明確にしている。このことを発端として、両者の関係に焦点をあてた発表をすべく依頼をうけ、これに関しては今秋に招待講演というかたちで応答・実現する予定である。

(2) また以上の成果をもとに、『モーセという男と一神教』を再検証したところ、宗教そのものに対する考え方において、フロイト自身の立場が一定ではなかったことが理解された。フロイトは宗教的教義を「錯覚」ないし「幻想」と捉えていたが、彼自身もまた一種のフィクションに拘束されていたのであり、その拘束力こそが彼のモーセ論を成立させているのである。

この点については、論文「自然学の後に来るもの——フロイトとカウンター・フィクション」を執筆し、フロイトの考察が実際のところキリスト教との一種の対決を経ていることを示した。「ユダヤ的なもの」がそのモーセ論を導いているにしても、それは彼の出自や環境から導出されるというより、当時の状況が彼をして強制的にいわば「転向」させ

た結果なのである。

またこの論文によって、フロイトにおける「ユダヤ的なもの」がフィクションという観点からみてどのように位置づけられるのか、そしてまたそもそもフィクションとはいかなるものであるのか、考察を深めることができた。フィクションとは単に現実の反対物であるのではなく、むしろ現実そのものを構成する力をもっている。

こうした議論は、国際的な注目を集めているフィクション論の研究に寄与できるはずであり、本研究も以前に行なった発表「『歴史小説』の可能性——『モーセと一神教』草稿序文について」(京都大学人文科学研究所、2008年11月)の延長線上にある。なお、この発表自体も論文「フロイトの『歴史小説』——『モーセという男と一神教』草稿序文を読む」として、フィクションに関する論集のなかに収録される予定である。

最後に本論文では、フロイトにおける「ユダヤ的なもの」を「コーラ」の形象と関連させて論じており、これは本研究の全体的な方向性にとっても重要な契機となっている。

(3) さらに以上の成果と関連して、フロイトのモーセ論に対するレヴィナスとデリダの見解の相違、そして彼らのテキストにみられる「ユダヤ的なもの」の差異と同一性について考察した論文を、現在準備中である。

この論考において導きの糸となるのが、レヴィナスとデリダに共通の友人であったブランショの言説である。戦後のフランス思想にとって、三者の友愛は実り豊かな発展をもたらしたが、彼らがつねに一定の見解を示しているとは限らない。むしろその差異こそが「ユダヤ的なもの」の理解にとって重要であるだろう。

もっとも、「ユダヤ的なもの」に対するブランショの見解は、その多くをレヴィナスに負っている。そしてタルムードの伝統を尊重するレヴィナスは、ユダヤ性にかかわる考察においては、正統派の思想からそれほど遠く離れてはいない。とくにフロイトのモーセ論は彼にとって受け入れ難いものであったに違いなく、表明されてはいないその理由を明らかにすることで、彼自身のユダヤ性をいわば逆照射することができるだろう。

他方、ブランショとレヴィナスに比べると、デリダはむしろフロイトに近く、とりわけ「エジプト的段階」については柔軟な姿勢を示しているように思われる。伝統的なユダヤ思想にとって、出エジプトは決定的な出来事であるがゆえに、それ以前の古代エジプト文化は軽視されがちだが、この点においてデリダの思考はその革新性を示している。そして「コーラ」という形象は、まさにエジプトにこそ深く関わっているのである。

そういうわけで、本論文ではフロイト・レ

ヴィナス・デリダにおける「ユダヤ的なもの」が「母なるもの」との関連から明らかにされるとともに、彼らの言説のうちに宿っている従来とは異なるユダヤ性が示されることになる。これにより、ユダヤ思想における新たな一局面を開示するのに寄与できるほか、三人の思想家についても、先行研究にはみられない側面を明示することができると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

① 小森謙一郎、自然学の後に来るもの——フロイトとカウンター・フィクション、思想、査読無、2011、掲載決定。

② 小森謙一郎、留保された未来——フロイトと偉大な男たち、思想、査読無、2010、No.1034、pp.125-152。

[学会発表](計1件)

① 小森謙一郎、フロイトとロラン——「大感情」について、武蔵大学人文学会、2010年12月16日、武蔵大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小森 謙一郎 (KOMORI KENICHIRO)
武蔵大学・人文学部・准教授
研究者番号：80549626

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：